

(01.5.17)

プラズマ核融合学会誌・編集後記

(本原稿は「プラズマ・核融合学会誌」6月号のために書いたものである。)

高部英明

この学会に、私は失望している。歴史の進歩とは民主主義が徹底していくプロセスである、と私は理解している。民主主義には民意を反映した政策を実施していく政権が必要であり、また、政権は将来を見つめて正しい民意形成の環境作りをしていく義務がある。

省庁統合、ITER の国内誘致の是非。正月来、2回にわたり週末返上で大論争に参加した。東京での ITER 検討会には350人も研究者が集まった。歴史的な出来事である。本学会が一番関係深いのに、その分析などを学会誌に取り上げる様子が無いのは残念である。もう、時期を失ってしまったのではないか。名古屋近辺の委員の方の労は多と感謝すれど、遠方の編集委員は年に2度の会議出席という制度のもどかしさを感じる。

省庁統合は3-4年も前から分かっていたことだ。文部、科学の省庁の枠を超えて省庁統合後の研究のあり方を民主的に議論できたのは、関係者の大多数が一会員として名を連ねている本学会の場しかなかったのではないか。それを怠ってきたことのつけが正月来のガタガタである、と私は思っている。一会員としての私にもその責任はある。

出だしに書いた失望の最大の理由は、省庁統合後の日本の核融合研究推進を議論し、未来像を会員と共に作っていくはずの本学会が、会長の言葉を借りれば「そんなことしたら、学会が分裂するだけです」という言葉に象徴されている不健全さを実感したことによる。会員が議論を通して良識ある判断を見出していくとは思わない、ということであろうか。この学会には民主主義的な運営はまだ無理、つまり、「ボトム・アップで正しい研究のあり方が提示されるほど、会員の意識は高いレベルにない」と判断しているからなのか。

これからは一つの省の下に核融合政策が進められる。本学会が会員の意見を吸い上げる場を積極的に企画していくように変貌するなら、私の失望感も少しは拭い去られるのだが。

(後記の後記： 編集後記は閲読などを受けない「治外法権」の記事である。その制度を利用してかねてより憤慨やるかたなく思っていた学会批判をした。フェアプレーの精神から掲載前に会長に「こんな記事を書きました」と原稿を送った。すると会長はこの次号に「高部委員の編集後記への返事」と題した2ページに及ぶ反論記事をお書きになった。)